

21世紀にキリストを生きる

21世紀にキリストを生きる

2012年3月：新しい歴史のページ

<原爆と原発>

あれから一年。

東日本大震災後、何度も日本を訪問し、福島県と一緒に歩き、その痛みを海外へ情報発信する担い手になってくれた16年来の友、韓国人のスファンが言った。「ぜひ、原爆の地を訪問したい」と。

現代世界では平和利用の名の下、私たちが享受すべきと考えてきた「繁栄」を支える大量エネルギー生産のために、原子力が用いられるようになった。人間は原子力をコントロールできるという考えが定着したからか。けれども歴史を見ると、原子力には恐ろしい破壊力があることを私たちは忘れることができない。原子力が瞬時に莫大なエネルギーを生み出すことを利用して、多くの人命を死に至らせた世界史上初の広島と長崎での原爆投下は67年前のできごとだ。けれどもこの数十年、原子力がどれほどのエネルギーと放射能物質を瞬時に放出するものかという記憶が私のなかで、すっかり色褪せていた。

20世紀前半、世界の列強による植民地政策推進を見てその列強を追い越そうと、日本は朝鮮半島を植民地とした。その歴史から韓国人のスファンと日本人の私のあいだでは「原爆被害国・日本」は避けてきたテーマだった。けれども、今回の原発事故を受け、多くのことを思いめぐらしていた韓国人スファンが、自分から原爆の地を訪問したいと言い出したのだ。

この彼女の提案に、東日本大震災と共に新しい世界の歴史のページがめくられたことを私は感じずにいられなかった。20世紀

前半の戦争の加害国と被害国という世界史の枠組みには収まらない共通の課題。それが「どのように原子力に向き合い、これからの社会を作るのか」だ。その根本は『はかなく消え去る人のいのち』と『人の暮らしのために莫大なエネルギーを生産できる原子力』；どちらを、なぜ、どのように優先するのか」というあまりにも不釣り合いだけれど、現代の人間存在のあり方の根源を問いかける二つの事象の対比だ。この不釣り合いな問いかけに共に戸惑い、立ち往生したのだ。この根源的な問いかけは、地球上のすべての人間の未来にとって、今まで考えてこなかったような包括的枠組みが待たなしで必要であることを示している。

3月初め、スファンと共に広島、そして私も初めての長崎を訪問した。一瞬にして何万人ものひとと町全体を飲み尽くし破壊し尽くした爆弾として使われた原子力。数々の残骸の記憶に圧倒され、私たちはし



ばしば無言でその場にたたずんだ。飲み尽くされた命には強制労働者として連れてこられた朝鮮半島の人々が数千いたという。私たちは民族を超えて共通の痛ましい過去を背負っていたことに気がつかされた。

物質の根本を作る原子核の「核分裂」によって、一瞬にして莫大なエネルギーを生み出す原子力。それがコントロール不能になったとき放出される放射能物質の恐るべき量とそれらが放射能を撒き散らす期間の気が遠くなるような長さ…。

2012年。広島と長崎の平和公園を歩きながら、私たちは国境を超えて目の前に置かれている課題を共有する人類の一員であることを痛感した。これほどのエネルギーを生み出す原子力をあらゆる状況でコントロールし続けることが、人間には可能なのだろうか。「私たち人間にはそれができる」と豪語できるだろうか。あのバベルの塔を作ろうとした人々が「頂きが天にまで届く塔を建て、名を上げよう。」と言ったように。

人間が生み出した知識の進歩と応用によって、多くの人々の命が助かり苦痛を伴う重労働から人々は解放されてきた。人が人らしく生きることを助けてくれる知識や技術はすばらしいものだ。けれども、この到達を「人には何でもできる」と傲慢に思い込

バングラデシュ：砂漠が森に

<4月7日の聖土曜日-土に帰る者として、復活の体を思い巡らして>

2012年の受難週、そしてイースターを私は久しぶりのバングラデシュで迎えた。20年近く前、スラムでの活動を始めたときの元同僚の召天10年目を彼女のご家族と過ごしたいという願いが与えられていた。今年のイースターは、彼女が召された4月の始めだとわかったとき、訪問の願いは確信



に変わった。今年はイエス様が十字架で処刑され遺体となった体が墓に置かれていた

み、これほど豊かな知恵を与えられ、貴く「造られた存在」という領分を超えるなら、自らを神の立場におくという悲劇的な過ちを犯すことになってしまわないだろうか。

「私たち人間は、すべてをコントロールすることができるのだ。」このことを実証したいという秘かな傲慢さから原子力利用を進めていくのなら、もっと取り返しのつかない事態が起きるのではないだろうか。知識を積み上げた人類が、あたかも自分たちの手ですべてを治めているかのようなその姿勢が、今、世界全体で問われているように思えてならない。

韓国人スファンとの広島、長崎という原爆被災地訪問を通して、2011年の東日本大震災とそこで起きた原発事故の深い意味が強く今、私たちに迫っている。日本だけでなく、世界の人々と共に歴史の分岐点という重要な1ページに立たされている、という厳粛な事実が…。

聖土曜日が、10年前に彼女が召された日だった。

スラムの活動や家族を通して、自分のすべてを赦して愛し、天国を約束してくださったイエス様に出会った彼女は、自分の実家に戻ってからも貧しい女性たちのための働きを自分の天命として仕えていた。そして10年前、突然の事故で32年の生涯を終えたのだった。

ご家族はこの日のために、わざわざ海外から訪れた私を温かく迎えてくれた。そして彼女の話をはっきりと語ってくれた。

今回、私が訪問したかったのは、人の目には短いと思える彼女の人生で、人々に仕えて蒔き続けた愛の種の成長の証人となる思いが起こされたからだ。家族の人たちと話すうちに意外なことを知った。彼女は私

たちとスラムの女性のための活動を始める前は、貧しい人に関わることを嫌っていたのだと。私には思いもよらないことだった。つまり、彼女はイエス様との出会いで変えられて芽を出した一人だったのだ。その機会を提供する者としていただいたことを知って、主に感謝した。

聖土曜日に、墓前で彼女の体が土に戻ったことを思いめぐらした。同時に、彼女がイエス様にあって得たいのちは、永遠に続いていることを感じた。彼女がこの地上にはもういないのは悲しいけれども、32年の間、イエス様に出会い変えられ、成長し続けた彼女の人生は、10年後に多くのことを投げかけてくれている。今も家族は彼女の



遺志を
継いで
召天の
日には、
近所の

貧しい女性たちにサリーを配っていた。

翌日イースターには、イエス様を永遠のいのちに至る道であり救い主と受け入れていた数人のご家族と、主を見上げ祈りのときを過ごした。彼女を偲びながら、私たちもやがて土に帰り、終わりのときに復活の体によみがえらせていただく希望があることを語り合った。

彼女が14年間一緒に暮らし、姉夫婦と大切に育ててきた姪は今年、一つのビジョンを携えて大学院を卒業した。その才能が評価され、愛する母国で自分の利益だけを求めることには満足しない若者が多く起こされるようにと、TVドラマの脚本を書く機会が与えられたのだ。姪は在りし日の叔母の姿から聖書を愛することを学んでいた。

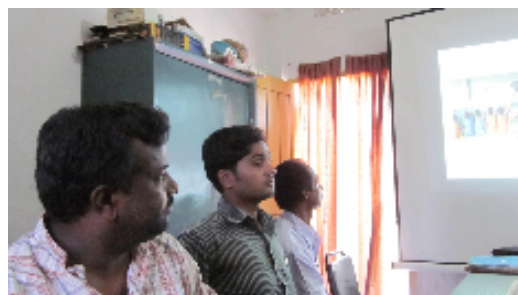
イエスの愛で押し出された彼女が、地上で蒔き続けた種は確実に成長し、実がなり森を作り始めていた。真実の主が恵みを見せてくださった訪問を感謝して。

< Bangladesh に広がるアウトカースト人権活動 >

今回の Bangladesh 訪問のもう一つの感動は、14年前20才の青年ミロンが設立したアウトカーストの人々の人権回復のための団体「ポリットラン（ベンガル語で救い）」の成長と着実な働きだ。

ベンガル歴新年の4月14日に10数年ぶりにミロンと家族となった奥さんや子どもが住む村を訪問した。人権回復に的を絞った「ポリットラン」のスタッフは総勢70人近くに増えたという。

「ディディ（お姉さん）が命名してくれたんだ。」集まったスタッフの前で紹介されたとき、私は思わずどぎまぎした。そんなたいそうな考えだったわけではなかったから。確かに若者3-4人でボランティア活動を始めたミロンが団体名を考えていたとき、私は「人の本当の回復が『救い（ポリットラン）』なんだ。」という話をしたことがあった。与えられたいのちと可能性を存分に出し切るのに、人生の出だしから差別を受けたのでは萎縮して持てる力を出すことはできない。社会の慣習だからとあきらめるのではなく、自分たちで立ちあがるように炊きつけたのも、数人での村のデモにも参加することになったのも私だった!? そのような交わりの中で、自分を貴い存在として造り罪を赦してくださった父なる神とのつながりが回復されるだけでなく、人とのつながり



りも健康も教育の機会もすべての回復としての救い。社会の最底辺で小突かれ、罵倒され続けた彼らにこの本物の「救い」を味

わって欲しかった。ふと私の頭に浮かんだ言葉が彼らの団体名になっていた。

今回の訪問では、彼らはパワーポイント（バングラデシュの農村でもパワーポイントを見れるなんて。何と時代は変わったこと！）を使って現在の活動を詳しく説明してくれた。

彼らの活動が大きくなるにつれ、人権回復とは直接は結びつかない自立開発のための資金提供をしようとする団体も現れたそうだが、断ったという。「目標から逸れたくないから」と。人間として踏みつけられていたその権利を回復することに専心したい。その明確な意識が全64県中54県で人権回復委員会設置を可能にしたのだと思わされた。彼の中の深い情熱をあらためて感じた。また、県の警察委員会で人権回復に協力してくれるようなセミナーを少しずつ開いている写真を見せてくれた。状況を変えて行くには自分たちを蔑視する人々にも関わり続ける勇気と忍耐がなくてはならない。彼はそれを実践していた。そして、アウトカーストの人々たちの意識改革のためには、聴衆と対話をしながら行動変容を促す「移動式双方向シアター（劇場）」という考えから各地で劇を演じるグループも生み出していた。他の団体と比べても全く見劣りしないほど、刷新的アイデアを大胆に先進的に取り入れていることに感動を覚えた。

十数年前、アウトカーストの人々は全く望みのない砂漠の社会に暮らしていた。それが、蒔かれた種が成長してここまで変化したのだ。国を覆いつくす森になるのはま

だ先かもれない。けれども、神さまはどれほど、種を育てたいと願っておられることか！種が蒔かれるのを待っておられる！

「声なき者の友」の輪の「砂漠の日本」の種まき運動にも、バングラデシュからの思いがけない励ましを受けたようだった。

主は真実なお方だ。「み国がきますように」という祈りを教え、種を蒔くことを教えてくださった方が、約束どおり、日本、そして、世界を森へ変えてくださることをさらに確信して、今日を歩む力を与えられた訪問となった。

「お祈りください」

- **5月下旬から6月の西アフリカ訪問のため:** 昨年、東日本大震災対応のため訪問をキャンセルしたため2年ぶり。2011年でなく、2012年に訪問する道が開かれた意味を見究め、人々と共に主を崇めることができますように。
- **福島の人々の格闘を通して、今後も世界の人々と原子力のことを考え、主から託されている未来に取り組むことができますように:** 福島の人々の継続する格闘とそこからの学びを引き続き、海外へ発信・交流する機会を模索・検討中です。

転換期の2012年。主にある同労者の皆さまに託された貴いお働きを主が豊かに祝福し導いてくださいますように祈りつつ。

柳沢 美登里

2012年5月15日

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈りとご支援をよろしくお願いいたします。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。

郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201

ご支援は「柳沢支援」と明記ください。領収書は振込票で代わりとさせていただきます。ご了承ください。主の働きを共にさせていただく恵みを感謝して。